

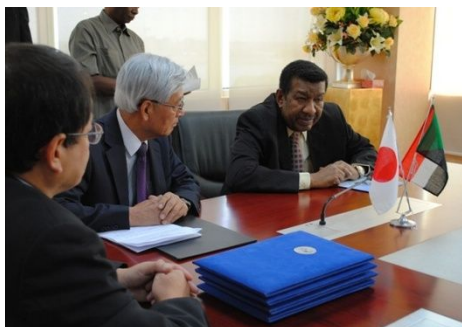


TOPICS

- ・事務所ニュース
- ・From Project / North
ハルツーム職業訓練校(青年海外協力隊)
- ・From Project / South
基礎的・技能・職業訓練強化プロジェクトフェーズ2
- ・着離任挨拶
- ・My Favorite / 鹿野 正明(JICA事務所)



事務所ニュース



無償協力・カッサラ市給水施設緊急改修計画 署名式

4月6日国際協力省にて、同省大臣、日本国大使、JICAスーダン事務所長出席の下、無償資金協力「カッサラ市給水施設緊急改修計画」の交換公文及び贈与契約締結のための式典が行われました。

同施設は、建設後20年余りが経過しており、浄水場で破裂事故が起こるなど、老朽化が深刻な問題であり、州政府からの改修の強い要望を受けていました。

この改修により、カッサラ市の人々に安定した給水サービスが提供でき、市民の生活向上に大きく貢献することができます。着工は今年12月予定。

JICA－国際協力省共催 プレス・カンファレンス

4月18日、国際協力省との共催でプレスカンファレンスを開催しました。同省の会議ホールには14社からのメディア関係者が出席し、スーダンにおける事業の実績と、今後の支援方針についての発表に耳を傾けていました。

国際協力省次官は冒頭挨拶で、震災で被害を受けた日本を見舞う言葉がありました。また、JICAの事業は高く評価されました。

質疑応答では、技術的な評価や今後の支援について、積極的な質問がありました。特に、南部独立後の支援方針についてメディアの関心が寄せられました。



スーダン政府から東日本大震災の見舞金

東日本大震災の被災者へのお見舞いやメッセージが、世界各国から届く中、スーダンからも約800万円の義捐金の寄付がありました。また、バシール大統領、サルバキール南部スーダン政府大統領からもお見舞いの言葉が届きました。

世界各国からJICAを通じて、被災者への応援メッセージが届いています。101ヶ国もの国から、JICA在外事務所やホームページにお見舞いのメッセージを寄せていただきました。心より感謝申し上げます。



写真：モロッコ日本語学習者からの応援メッセージ

職業訓練校の日常

青年海外協力隊 自動車整備
木村 亮一 隊員

配属先であるハルツーム2職業訓練校はハルツーム空港すぐ近く、アフリカストリート沿いにあります。国立の職業訓練校で8年制の義務教育修了者が対象者。学科の種類は、自動車、電気、木工、溶接、金属加工、製図、空調など。生徒数は約1200名とたくさんいます。私は3代目の隊員ですが、前任者のお陰で日本の評判は極めて良好。皆とても友好的です。



職業訓練センターの同僚と。

活動の方ですが、配属先からは「電子制御エンジンについて対応できるようにになりたい」、という強い要望があります。しかしながら自動車科の現状はといいますと「設備は老朽化が激しい」「整理整頓が出来ていない」「時間割は適当」と基礎的な問題も多くあります。



授業の風景



私は時にはワークショップのドアを直したり、水道の調子を見たり、道具は片づけようと小言を言いながらも、「電子制御」を重要課題と考え技術移転を目指しています。これには単に要望があるというだけではなくスーダンの自動車事情によるものでもあります。

スーダンでは古い車は60年代から最新型の新車まで様々。大まかな目算ではありますがハルツームでは少なくとも50%の車がこの電子制御と呼ばれるシステムです。



また、スーダン人の日本に対するイメージは「ハイテクな先進国」。日本人という自負もあり、日本の技術を学びたいとする期待に応えるべく、日々同僚達と紅茶を酌み交わしながら活動しています。

この同僚達ですがのんびりしてはいるものの勉強熱心。新しいものは取り込み、自身の専門分野に対して分からないものは無くしたいという思いが伝わってきます。JICAの支援により機材供与が行われ、それらの活用方法などを学ぶべく勉強会等を開催したりしています。

新しい事を出来るようになった同僚の笑顔はいいものです。技術協力を通じ日本車が少しでも多く普及してくれればと思いを馳せつつ任期を全うしていきたいです。

木村 亮一

／きむら りょういち

青年海外協力隊
(短期) 2010年9月よりハルツーム2職業訓練校にて活動中。(任期10ヶ月)

自動車整備の専門学校を卒業

後、一般企業で約5年間勤務。退職後、青年海外協力隊、自動車整備隊員としてイエメンに約2年間派遣。その後スーダンに短期隊員として赴任。





— いろいろなプロジェクトの専門家の方々から、スーダンで活動する中で感じるさまざまな思いや発見などを綴っていただくコーナー —

南部4回目は、南部スーダン基礎的・職業訓練強化プロジェクトの盛田 専門家です。

基礎的・職業訓練強化プロジェクトフェーズ2

モニタリング 盛田 詩子

新しい国づくりを支援

南部スーダンでは、20年以上にわたる内戦の影響で、2005年1月に南北包括和平合意(CPA)が締結されてからも、インフラの未整備やその復興・開発に必要な技能を持った人材の不足が依然として大きな課題となっています。

2006年に本プロジェクトのフェーズ1でジュバに初めて赴任した際も、南部の首都だというのに、舗装道路は穴だらけのものが1本だけ、宿泊場所も業務場所もテント、町の中はコンクリートの四角い建物はほとんどないという状態でした。また、建設ニーズが高まるなか、作業にあっているのは主にケニア、ウガンダなどからの近隣国労働者で、スーダン人はなかなか就労できていないという状況でした。

基礎的・職業訓練強化プロジェクト(SAVOT)はそのような状況を鑑み、南部スーダンの人々の生活の向上・安定を図るとともに、復興事業に参画できるような人材の育成をめざし、各種職業訓練プロバイダーの能力強化と技能訓練機会の提供を行っています。2006年から2010年まで実施されたフェーズ1では、主にジュバをプロジェクトサイトとし、①公的職業訓練機関であるMulti-Service Training Centre (MTC)の能力強化、②NGOの訓練実施能力強化、③パートナー訓練プロバイダーの就業支援サービス能力強化を実施しました。

また、上記活動を通じ15の職種で計38種類の訓練コースを実施し、社会的弱者や除隊兵士も含む3,861名に訓練を提供することができました。



2010年8月に開始されたフェーズ2では、フェーズ1の経験を踏まえて、公的職業訓練機関、NGOの自立発展性に重点を置き、①南部スーダンの3公立職業訓練センターの訓練指導技術、運営能力強化、②NGOによる訓練サービスのジュバ以外の主要都市での拡充に向けた活動を行っています。プロジェクトサイトをマラカル、ワウも含む3都市とし、活動地域も広くなりました。



フェーズ1から活動をしていて感じるのは、技能もさることながら、職業規範というか、働くことに対する意識から、改革が必要な人が多いということです。先に述べたような、外国人労働者が多いという点も、必ずしも技能の差のみからというよりも、定められた時間通りに、TORに沿って働くことができないことから、スーダン人の雇用をためらう企業や団体が多く見受けられます。

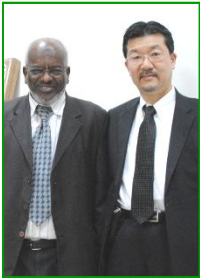
SAVOTが支援しているMTCでも、当初は、生徒は時間通りに集まっているのに指導員が来なかったり、自分たちの訓練の準備を行うのに日当を要求したりということが日常茶飯事で、議論の毎日でしたが、3年以上にわたって一緒に働いてきた中で、少しずつ彼らの意識も変わってきていると感じています。また、訓練を受講した卒業生が、自分の店を開いたり、就職したりして、自活し家族も養っていているのを見るのは、本当にうれしいものです。NGOの職員も、訓練管理や、コンピューターを利用したレポート作成等、フェーズ1開始時にはできなかったことが、フェーズ1終了時にはできるようになるなど、能力向上が著しく、団員にとって大きな励みとなっています。

南部スーダンは今年7月には独立するということで、自立発展に向けた人材育成、組織強化がこれからますます重要になってくると思いますが、素朴でおおらかな南部スーダンの人々とともに、新しい国造りの一角を担っていただければ願っています。

盛田 詩子 /
もりたうたこ



2006年9月に開始された同プロジェクトフェーズ1から参画し、南部スーダンの技能訓練・職業訓練を通じた復興支援、生計向上、平和の定着に取り組んでいる。



森 裕之〔スーダン駐在員事務所 所長〕2011年4月

憧れのスーダンにやってきました！

初めての海外旅行がケニアとザイール。学生時代はアフリカ研究会に所属し、ケニアの学生を日本に招いたり、アフリカの新植民地主義や文学について「青い」議論をしていました。卒業後はなぜか中東アラブに方向転換。オマーンで石油を掘り、シリアで水や農業の開発に携わり、ヨルダンでイラク復興支援に関ってきました。スーダンはアフリカとアラブの混じる国。青ナイルと白ナイルが自然に混じりあうように、アフリカとアラブが平和的に合流するような国になるように、何か少しでも貢献ができるとうれしいです。

着任 挨拶



南 香子〔スーダン駐在員事務所 企画調査員〕2011年4月

4月12日に着任しました南香子(みなみきょうこ)と申します。企画調査員として、保健セクター、ボランティア事業、福利厚生を担当しています。以前、ケニアとの国境近く、スーダン南部東エクアトリア州に駐在していましたが、今回、ハルツームに初めて来て、北部と南部で異なる文化、習慣に日々驚きつつ、生活しております。よろしく願いいたします。

宍戸 健一〔スーダン駐在員事務所 所長〕2011年4月

ハルツームとジュバを初めて訪れた2007年4月当時のことを思い起こしてみると、随分変化があったとつくづく感じます。お陰様で、この4年間JICA事業も順調に拡大させて頂き、恐らく今年も南北スーダンを合わせると、アフリカでも3本指にはいる事業量に達すると思います。ここまで拡大できたのも、関係者の皆さまのご理解とご支援があったからだと思えます。重ねまして厚く御礼を申し上げたいと思えます。本当にお世話になりました。近いうちにスーダンを訪れることもあるかと思えますが、その際はどうぞよろしくお願いいたします。



離任 挨拶



五十嵐 幸雄〔JICAスーダン事務所・ボランティア調整員〕2011年1月

現場で汗を流すJICAボランティアを通じ、スーダンの人々の境遇や思い、本音の一端を垣間見ることができました。同時に、彼らのたくさんの笑顔に出会えたことを幸せに思います。安全対策面での苦労といえば、スーダンに対する日本側のマイナス・イメージ払拭でしょうか。しかしそのイメージも、皆様のスーダンでのご尽力を通じて必ずやプラスに転じるものと、スーダン応援団の一人として信じています。2年間ありがとうございました。

My Favorite! メロエピラミッド



鹿野 正明
JICAスーダン事務所・在外専門調整員)

ハルツームからナイル川下流約200キロメートルの東岸、かつてのクシュ王国の首都、メロエの遺跡へ行きました。

砂漠の砂に足を取られながら、メロエ遺跡のピラミッド郡を見てまわりましたが、紀元前の建物が、崩れながらも残っていて、歴史を垣間見た感じがします。

石壁に刻まれた絵や文字の意味は全然わかりませんが、当時の生活や政治に想像を膨らませること、そして調べてみることで、一つの発見に繋がるのかもしれませんが。地理的に気候や条件の悪そうなメロエで、何故クシュ王国が発展したのか気になって調べてみましたが、鉄鉱石や燃料など、特産品を活かした交易により富を得たそうです。

砂漠に手作りサンドイッチを持ち込み同僚と一緒に食べました。「日常の中から抜け出して、非日常を体験した気分」と、観光気分が満喫できました。



～広報よりお知らせ～

JICAスーダンフォトコンテストでは、皆様からのご応募、ありがとうございました。素敵なお写真を多数ご提供いただきました。今後も事務所広報写真の充実化を図るため、皆様のご支援、ご協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

